永田町にも霞が関にも誰もいらっしゃらないと思いますよ。要は、頼んだらすぐにぱっと会ってくれるようなものなんですか。そうじゃないでしょう。これは答弁は要りませんので。

一件、時間なくなってまいりましたので、最後にちょっと確認させてもらいたいんですが、私、この柳瀬首相秘書官の主な発言の中で、ずっと見ていると、最初の方はずっと具体的な特区の申請に当たって必要なことというのが書き連ねられているんですが、最後のところに、加計学園から、先日安倍総理と同学園理事長が会食した際に、下村文科大臣が加計学園は課題への回答もなくけしからぬと言っているとの発言があったと、この文章が書かれているんです。

これ、私見ておりまして、よく見ておりまして何か違和感を感じたのは、ほかのことは特区のことだけを言っているにもかかわらず、最後だけ物すごく個別具体的な名前まで入っちゃっている。何なんだろうと思って実は調べてみましたところ、この当該、二十七年四月の三日の日、三時から四時半まで面談されているというふうに記録が残っていると聞いておりますが、三時半過ぎに、下村文部科学大臣と、それから当時の文部科学省の事務次官が官邸にお入りになられているんです、皆さんが懇談をされている最中に。

総理のスケジュールを管理する立場にあったとさっきおっしゃいましたけれども、この点については御存じでしたね。

○参考人（柳瀬唯夫君）　まず、一時間半お会いしたというふうに今治市の出張記録かな、なっているというふうになっていましたけれども、ちょっと私、一時間半も人にお会いするというのはちょっと到底考えられないと思いますので、ちょっとそれはちょっと事実として、向こうの出張記録はそうかもしれませんが、私、ちょっと一時間半も同じ人に会うとは到底思えません。

それから、今、三時半とおっしゃいましたかしら、下村大臣が総理のところに来られたというのは……

○委員長（金子原二郎君）　時間が来ておりますので、簡潔にお願いします。

○参考人（柳瀬唯夫君）　総理の日程、当時の新聞見たらそうなっておりましたけれども、私はそれには同席をしてございません。それはなぜかというと、次官が来ていましたけれども、教育実行会議の話で当時は来られていたんだと思いますので、全く関係ない話だと思います。

○川合孝典君　細かいことをよく覚えていらっしゃるなということを最後に感じましたが。

これで終わります。ありがとうございました。

○蓮舫君　立憲民主党・民友会の蓮舫です。

柳瀬さん、まず確認をしますが、あなたの記憶は自在になくしたり思い出したりするものなんですか。

○参考人（柳瀬唯夫君）　当然、記憶ですから、三年前の記憶ですから、曖昧な部分たくさんございます。いろんな話を聞いて、ああ、そうだったのかなというところもございますが、先ほども申し上げましたけれども、私が記憶を調整しているとか、そういうのが何かよく新聞に出ていますけど、全くない話でございまして、私は一貫して当時から今治市や愛媛県の方とお会いした記憶はないし、加計学園やその関係者の方とお会いした記憶はあると、そこは一貫してございます。

○蓮舫君　いや、違います。一貫してあなたは加計学園の関係者とお会いしたとは言っていません。言ったんですか、国会で。

○参考人（柳瀬唯夫君）　当時、集中審議で今治市の職員の方とお会いしたのかという御質問を何度も受けましたので、それに対して一つ一つお答えをいたしました。

○蓮舫君　つまり、聞かれてないから言っていないというだけで、それは不誠実じゃないですか。

○参考人（柳瀬唯夫君）　聞かれたことを一つ一つお答えしてきたことで全体像が見えなくなってしまったということで、国民の皆様にも分からないし、国会の議論も混乱したということで深くおわびを申し上げたいと思います。その上で、今日

は午前中からしっかり答えておるところであります。

○蓮舫君　加計学園との四月二日の面会、出席していた加計関係者の獣医学の専門家は吉川泰弘さんですか。

○参考人（柳瀬唯夫君）　これは当時のことなので、ちょっと必ずしも定かじゃございませんが、一つは、元東大教授の方というお話、方からお話を聞いたのはよく覚えています。

　それから、それがその四月二日であったのか、その前の二月から三月に一回来られたときだったのか、そこは必ずしもクリアではございませんが、いずれにしても、二月から三月に一回会ったときと、その四月に、頃に一回会ったときのどちらかにはその元東大教授の方がおられたという記憶はございます。

○蓮舫君　その人は吉川さんですか。

○参考人（柳瀬唯夫君）　私は、吉川さんというお名前を記憶してございませんでしたけれども、半年ぐらい前だと思いますけれども、朝起きてテレビのニュースをつけたときに加計学園のニュースが流れていて、そのときに加計学園の獣医学部長になる予定者としてその吉川さんという方のお写真が出ていまして、あっ、この人はお会いしたことあるし、お話を聞いた人だなと思いました。それが四月二日なのかその前なのか、そこはちょっと定かではございません。

○蓮舫君　午前中の答弁と違うことになっているんですが、これ、記憶違いではないですね。

　私の持っている情報では、同席した加計学園関係者は文科省ＯＢの方と聞いています。

○参考人（柳瀬唯夫君）　そこの記憶が必ずしも定かじゃございませんが、その二月から三月に会ったときと四月二日に会ったときと、それは両方、獣医学部の話を加計学園の方はされていまして、吉川先生がそのどっちに参加されたかはちょっと必ずしもクリアじゃございません。

　それから、そこの、加計学園の関係者の文科省のＯＢの方ですか、それはちょっと、その方のお名前はちょっと記憶にございませんが、いずれにしても、加計学園の事務局の人と、一回はその元東大教授の、これは吉川先生だと思いますけれども、あともう一人、別の関係者の方がいらしたんじゃないかと思います。

○蓮舫君　四月二日の面会時間、九十分ではないと言いました。四十分間だったんじゃないですか。

○参考人（柳瀬唯夫君）　いや、もう全くどれぐらいお会いしたかは覚えていませんけれども、九十分というのはさすがに長過ぎるなという気がしたということを先ほど申し上げたわけでございます。

○蓮舫君　四十分、十五時から始まって十五時四十分に関係者全員が退室したという私は情報を得ています。それぐらいですか。

○参考人（柳瀬唯夫君）　いや、その面談したときに、一つ一つ、十分とか三十分とか四十分とか、そういう記憶はない。ただ、九十分というのはさすがにないんじゃないかなというふうに思います。

○蓮舫君　同じ総理官邸で十五時三十五分から四十八分まで安倍総理と下村文科大臣が会っています。この後、安倍総理は空白の九分間、次のアポが十五時五十七分です。この間、どこかであなたは安倍総理並びに下村大臣に接触していませんか。

○参考人（柳瀬唯夫君）　全く覚えはございませんが、少なくとも下村大臣と官邸でお会いしたという記憶は全く残ってございません。

○蓮舫君　安倍総理とは接触しましたか。

○参考人（柳瀬唯夫君）　それは、安倍総理とは一日にもう五回も十回も顔を合わせますので、そこでお会いしたかどうかというのは、それはもう全く記憶の呼び起こしようもないと思います。

○蓮舫君　じゃ、そこで今、加計学園関係者にお会いしたということを、メモか何か、あるいは報告はしましたか。

○参考人（柳瀬唯夫君）　私は、加計学園の方とお会いしたり獣医学部のお話を伺ったというのは一切、総理に御報告したり、何か指示を受けたことは一切ございません。

○蓮舫君　二月から三月、あなた、四月より一、二か月ぐらい前の印象で加計学園関係者と会ったと言いますが、これ三月二十四日ではないですか。

○参考人（柳瀬唯夫君）　その一、二か月前というか、四月にお会いした、ちょっと四月二日かどうかも覚えていませんけれども、その前にお会いしたというのは明確に覚えが、ちょっと日付がどの辺だったか、ちょっと私分かりません。

○蓮舫君　総理に報告していないという、総理関係のことは明確に覚えていて、それ以外は全部記憶が曖昧ではないんですが、最初の面会は三月二十四日と聞いているんですが、これはなぜ加計学園関係者に会ったんでしょうか、短く教えてください。

○参考人（柳瀬唯夫君）　最初にお会いしたときは、まあちょっとこれも定かじゃありませんけども、アポイントの申入れがあって、今度上京するのでお会いしたいということでしたので、まあお会いをしたということでございます。

○蓮舫君　何の案件でお会いをしたんですか。

○参考人（柳瀬唯夫君）　そのときに具体的な案件の申入れがあったかどうか、ちょっと記憶にありませんけども、まあ上京されてお会いしたいということでしたのでお会いをしました。

○蓮舫君　具体的な案件が分からないけれども、上京したのでお会いをしたい、つまり、首相秘書官である柳瀬さんと加計学園関係者はそれぐらい密接な関係ということでしょうか。

○参考人（柳瀬唯夫君）　元々、総理の別荘のバーベキューでお会いして、まあ面識はありました。

　それから、私は総理秘書官時代、まあちょっと相当時間タイトでありましたが、時間がある限りは外の方のアポイント、申入れはお会いするようにしていましたし、私の記憶ではアポイントの申入れをいただいてお断りをしたことはなかったと思います。

○蓮舫君　このバーベキュー等でお会いをした、どなたから紹介されたんですか、加計理事長、学園関係者は。

○参考人（柳瀬唯夫君）　これはですね、総理はよく河口湖の別荘に行かれて、御親族の方や御友人らをいっぱい集めてバーベキューをやるということはよくやっておられました。そのときに、秘書官も緊急時対応でいつも何人か御一緒をしてございました。

　したがって、御紹介いただくとかいうそういう場ではございませんで、わあっとそこのお庭に総理の御親族やお友達の方がいて、秘書官がいて、まあ総理の、政府の何人かの方がいてと、そういう場で何十人もいるところでお会いをしたということで、特に誰かに紹介されたわけではございません。

○蓮舫君　つまり、全く紹介されていなくて、何十人もいる、たくさんいる中でお会いをしたその人からアポイントの連絡が来て、案件も分からないで、それでお会いをする間柄なんですか。

○参考人（柳瀬唯夫君）　先ほど申し上げましたように、私は基本的にアポイントの申入れがあれば、政府の外の人、お会いするようにしていましたので、まあこれも例外じゃないということでございます。

○蓮舫君　三月二十四日の面会、先ほどあなたは四月二日に学園関係者側から国家戦略特区という提案があったと言いましたが、三月の会合時点で既にあなたから加計学園関係者に国家戦略特区でいこうと助言していませんか。

○参考人（柳瀬唯夫君）　そこの具体的なやり取り、記憶がクリアではありませんけども、その三月の、その最初にお会いしたときも、構造改革特区で何度もやっているけどうまくいかないという話がございまして、そのときにはもう国家戦略特区制度がスタートしていましたし、安倍政権として大事な柱でございましたので、それは、当時、その戦略特区をＰＲするというのは……

○蓮舫君　三月に言いましたか。

○参考人（柳瀬唯夫君）　ええ。それで、そのときに国家戦略特区の話になったと思います。ただ、そのときどこまで具体的な話になったかは、そこ

はよく分かりません。

○蓮舫君　つまり、もうそこで既にもう国家戦略特区の話題が出たら、その後の四月二日のアポイントのときに、国家戦略特区でいくと事業者ではないから愛媛県、今治市も行った方がいいだろうと、それを呼ぶように加計学園に提案していませんか。

○参考人（柳瀬唯夫君）　ちょっと、私の方から呼ぶようにと言った記憶はございませんけども。

○蓮舫君　そして、その四月二日なんですが、午後はあなたとお会いしています、三時から。午前中は内閣府の特区担当の藤原次長とお会いをしているんですが、藤原次長と加計学園の関係者、今治市、愛媛県とのこの会合をセットを指示したのはあなたですか。

○参考人（柳瀬唯夫君）　それは、指示したことは、指示はしていませんけども、むしろ、私の方が、加計学園の方が来られたときに、もし特区、国家戦略特区を活用するんであれば、内閣府の特区事務局と話をする必要があるよという話をしたら、もうそれは既にお会いをしているということでございました。

○蓮舫君　あなたが、じゃ示唆したんですね、藤原次長が担当者で、会った方がいいと。セットはしていないんですか。

○参考人（柳瀬唯夫君）　この国家戦略特区制度の事務局は内閣府の国家戦略特区事務局であるという話はしたと思います。

○蓮舫君　三月と四月の加計学園との面会をする間に、あなたは余り詳しくないからといって、獣医学部関係の、獣医師を所管する農水省、大学設置の文科省、感染症対策の厚労省、レクを受けて勉強したと、構造改革特区との違い、国家戦略特区、これ勉強したと言っています。

そうするとですね、四月二日、国家戦略特区は自治体が申請すると認識していたんじゃないですか。

○参考人（柳瀬唯夫君）　それはまあそういう認識だったと思いますけれども、当時はその具体的なプロジェクトの申請がどうこうというところに私の関心はございませんで、そもそも獣医学部新設の解禁を、道を開けるのか開けないのか、開けるんであればどういう条件にするか、そちらの制度設計の方に関心がありまして、まあ具体的に誰がどう申請するのかというところは関心の外でございました。

○蓮舫君　いやいや、制度設計は、これはこれまでの構造改革特区と違って、国家戦略特区は、自治体が申請して、議長である総理が決めて、スピード感を持って岩盤規制を突破していくんです。だから、自治体が申請をしなければいけないのに、四月二日の十人近くの会議のときのバックシートに自治体がいるというのはなぜ記憶からぽこっと漏れるんですか。

○参考人（柳瀬唯夫君）　それは、面談したときに、メーンにお話しした人は覚えていますけれども、余りお話しにならなかった方は記憶からだんだん抜けていく、それは人間、普通のことだと思います。

○蓮舫君　いや、あなたの普通は人と違うと思います。

三回目、六月四日に、今治市は特区の申請をしました。その前後に、また加計学園がその申請をあなたに官邸に報告に来る、これは不自然です。

○参考人（柳瀬唯夫君）　それまで加計学園の方からお話を伺っていましたので、まあそういうことになりましたというお話をいただいたんだと理解してございます。

○蓮舫君　申請者は自治体で、学部設置の事業者の公募受付、加計学園が手を挙げることになる、ようやく手が挙げられる受付は、その二十か月後の一月四日です。それで、そこに加計学園だけが手を挙げている、途中で京都は排除をされて一校だけに限る、そして前川前文科事務次官がいろいろと行政がゆがめられた、これ全部つながっているんですけれども、そのスタートが四月二日の、あなたが、あなたが加計学園とお会いをした、ここがスタートになって、十年十五回全て却下され

ていたものが一気に動き出したんですね。

これ、加計ありきだったんです、ないでしょうか。

○参考人（柳瀬唯夫君）　まずですね、この私が加計学園に面会する前の平成二十六年九月の国家戦略諮問会議で、先ほど申し上げました民間議員から獣医学部新設の解禁の提案があって、それに対して、総理が早急に検討していきたいという発言がありました。当時は、その当時の資料を見ますと新潟市の提案があったわけでございます。

で、先ほど申しましたように、当時は制度をどうするかというのが関心でございまして、具体的にどこにするかというのは関心の外で、私の理解も、具体的にどこを選ぶのかというのはもうずっと後、制度ができた後に進められる手続だと理解してございました。

実際に、私は平成二十七年八月に官邸を去りましたけれども、制度設計が終わったのはそこから一年以上先の二十八年十一月と聞いております。で、まあ先ほど蓮舫先生がおっしゃいましたように、具体的な公募の提案があったのは二十九年になってからだと。

そこで、先ほどの加計ありきという話ですけれども、今治市が、今治市が加計学園を念頭に置いておられたかどうか、それは今治市と加計学園の関係でございますけれども、今治市が最初から加計学園を念頭に置いていた、それは、加計ありきは、今治市はそうだったかもしれませんが、国家戦略特区としてどこを選ぶか、それはきちっとした公正な手続で決まっていくということだと理解してございます。

○蓮舫君　愛媛県のメモで、これ、加計学園から言われた、安倍総理と加計さんが会食して下村文科大臣がまあけしからぬと発言を言っている。これは、あなた言われましたか。

○参考人（柳瀬唯夫君）　私、このやり取り、記憶ございません。

ただ、この愛媛県からいただいたメモを見ると、加計学園からと書いてあるなということでございます。

○蓮舫君　加計学園から言われてあなたに意見を求めた、そしてあなたが、文科省に説明するのがいいとの助言があった。しましたか。

○参考人（柳瀬唯夫君）　私、そもそもこのような話があったという記憶ございませんので、当然それに対して、提案書と併せて整理して説明するのがいいと、そのようなことを言ったという覚えもございません。

○蓮舫君　記録と記憶はどちらが信用されると思いますか。

○参考人（柳瀬唯夫君）　これは、愛媛県知事のあの記者会見などを見ましても、口頭説明用の個人の備忘録ということでございましたが、それがあちこちに配られ、マスコミに出て、それによって信用力が高まるというのはとっても変な話だと思います。そんなことを言えば、やり取りしたときに、片っ方がメモを取って片っ方がメモを取らなければ、メモを取った方が常にこうだと後で言えるのは、それはちょっとさすがにおかしいと思います。

○蓮舫君　さすがにおかしいのは、あなたの記録とそして記憶が全部ないことです。愛媛県の中村知事は、職員が文書をいじる必要性は全くないと、これ会見で言っていますよ。

じゃ、愛媛県がうそを書いているんですか。

○参考人（柳瀬唯夫君）　私が申し上げているのは、私は記憶がないということを申し上げて、愛媛県がどうかというようなことを申し上げているつもりは毛頭ございません。

○蓮舫君　決定権者は安倍総理、決めてほしい人は腹心の友の加計理事長。この二人が疑われることのないようにするのが首相秘書官の仕事なのに、むしろ、つないでいる疑いがやっぱりまだ濃厚です。

委員長、今日の柳瀬さんの発言の正当性を確認するために、愛媛県、今治市、それぞれ黒塗りされて出したものも含めて全ての面会記録、全てをこの国会に黒塗りをなくして出してもらいたいと

いう要望と、中村愛媛県知事にこちらに参考人で来てもらいたいと要望します。

○委員長（金子原二郎君）　理事会で後刻協議をいたします。

○蓮舫君　終わります。

○秋野公造君　公明党の秋野公造でございます。お役に立てるように質疑をしたいと思います。

ここまでの審議におきまして、事実関係の解明が明らかになってきたと思います。私からは、特に国家戦略特区制度の仕組みを踏まえて質問をしていきたいと思います。

これまでの質疑、答弁によりますと、今治市が獣医学部新設については構造改革特区で十五回提案しても認められなかったと、しかしながら国家戦略特区になって認められたということでありま す。

まず、柳瀬参考人にお伺いをしたいと思いますが、構造改革特区よりも国家戦略特区の方が改革の実効性が高いと認識をしておられましたか。

○参考人（柳瀬唯夫君）　どちらも有効な制度で、それぞれ制度として一長一短持っていると思います。

ちょっと制度の詳細は私、詳しいわけではございませんが、私が理解しているのは、国家戦略特区制度も構造改革特区制度も対象地域を限定して規制改革を行うという点ではそれは共通をしていると思いますが、ただ手法とかが多少違うと思っていまして、構造改革特区は一旦措置された規制改革事項であればもう希望する全国どの地域でも、まあいわゆる自動的に申請できると、こういうふうになってございますけれども、国家戦略特区制度は活用できる地域を限定することで特に固い岩盤規制に突破口を開くと、そういう制度であると、こういうふうに理解してございまして、それぞれ一長一短あるという意味はそういうことでございます。

特に、国家戦略特区制度につきましては、規制改革提案の実現に向けまして民間有識者が主導する強力な推進体制を整えるということで、安倍政権の柱として岩盤規制改革を加速する制度だという位置付けで当時は認識してございました。

○秋野公造君　加計学園の方から、平成二十七年四月、国家戦略特区でいきたいという話があったということでありますけども、愛媛県のメモによると、柳瀬参考人は当時、現在、国家戦略特区の方が勢いがあると、このように御発言をされたということでありますが、実際にどのような発言をされたのか、お伺いをしたいと思います。

○参考人（柳瀬唯夫君）　私がどう発言したか、詳細を覚えているわけではございませんが、国家戦略特区制度はやっぱり安倍政権の成長戦略の柱として、ちょうど我々、これスタートした割かし直後でございまして、ありとあらゆる場で宣伝をしていたという記憶も、会う人会う人にこういうのできたんですよという話はしてございましたので、それは私だけじゃなくて政府を挙げて、総理御自身も行く先々で国家戦略特区制度というのができましてというお話をされていましたので、そういう趣旨で申し上げたかもしれないと思います。

○秋野公造君　改めて、柳瀬秘書官だけでなく、総理自身も国家戦略特区を強い思いで進められようとしていたという認識でよろしいでしょうか。

○参考人（柳瀬唯夫君）　当時、アベノミクス三本の矢の一つとして成長戦略、そこで岩盤規制改革不可欠だということで、総理はよく御自身でおっしゃって、これまでできるはずがないと言われた固定観念を打ち破ってまいりますとか、ニューヨークだったと思いますけれども、私自身がドリルのやいばとなって岩盤を打ち抜きますと、まあ、かなり総理御自身の強い思いを持って当たっておられたと思います。

その結果、戦後、地域独占した電力市場の小売市場の完全自由化とか、再生医療について世界最先端の規制緩和をやるとか、こういったかなり、ちょっと前には考えられなかったような、ややタブー視されていたものをトライをされたというふうに思ってございますし、国家戦略特区制度もその一環として創設されたというふうに理解をして